

「コロナワクチンを接種しよう」という空気を生み出したのは日本政府の唯一の功績「みんなワクチンを打ってますよ」に弱かった日本人の国民性

11/24(金) 集英社オンライン

ワクチンを学び直す #1

ワクチンについてさまざまに論じられている中での最新の動き、予防接種制度や海外も含めたワクチン接種の全体像に着目。

日本と海外のワクチンの接種状況の違いと、日本でワクチン接種が機能した理由について考察、書籍『ワクチンを学び直す』より一部抜粋してお届けする。

日本のワクチン政策の2つの前進—— HPV ワクチンと新型コロナワクチン

この数年、日本のワクチン接種の環境において大きな前進が2つありました。

1つは、新型コロナウイルス感染症に対する mRNA（メッセンジャーRNA）ワクチン提供が非常にうまくいったことです。これは当時の政府、内閣、厚労省ら関係諸氏の功績だと思っています。

もう1つは、ヒトパピローマウイルス（HPV）ワクチンの積極的勧奨が再開されたことです（*1）。とはいえ、HPV ワクチンについては、巨大なマイナス状態だったのが、ようやくスタート地点に戻ったという感じではあるのですが。

これまで日本は、予防接種による感染症の予防にあまり積極的ではありませんでした。日本の制度は世界の先進国に大きくおくれを取り、だからこそ「ワクチン後進国」というありがたくない評価を得てきたのです。

しかし、世界を震撼させた新型コロナウイルス感染症の世界的流行（パンデミック）と戦うには、ゲームチェンジャーたるワクチンの活用が欠かせません。日本は新型コロナワクチンの入手、提供を迅速に行ない、世界的にも新型コロナの被害が非常に小さな国となりました。

本稿執筆時点（2023年4月）で、新型コロナで亡くなった方は世界で685万人以上のほりまます。じつは、おそらくこれも過小評価で、実際にはもっと多くの方が新型コロナで亡くなったであろうことが推測されています。世界でもトップレベルの医学雑誌『ザ・ランセット』に掲載された論文では、新型コロナウイルス感染症、COVID-19で亡くなった方は1800万人以上と推定しています（*2）。

地球上でこんなに短期間にたくさんの方が1つの感染症で亡くなった事例は近年ありません。おそらくは、数千万人が亡くなったといわれる1918年の「スペイン風邪（パンデミック・インフルエンザ）」以来の被害といえるでしょう。

まさにCOVID-19は100年に1度の巨大な厄災なのです。最も死者が多かったのは米国でした。すでに106万人以上が亡くなっています（*3）。米国では建国以来、多くの事件や戦争が起き、そのたびにたくさんの死者が発生してきました。

ウィキペディアの情報ですが、独立戦争での死者が3万1千人、南北戦争の死者が65万人以上、第1次世界大戦の死者が11万6516人、第2次世界大戦のそれが40万5399人、朝鮮戦争が3万6516人、ベトナム戦争が5万8220人、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロが2996人、イラク戦争が4492人だったとされています（*4）（*5）。

また、1981年に発見されたエイズの米国における総死亡者は、現在までに約70万人、1918年のスペイン風邪の死者が67万5千人、2017年のハリケーン・マリアの死者がおよ

そ3千人、2005年のハリケーン・カトリーナの死亡者が2千人弱です（*6）。

つまり、COVID-19は、米国建国以来、人災、天災を含めて最大の死者を出した悲惨な感染症だったのです。同様に、フランスでは16万人以上、ドイツでは17万人以上、英国では20万人以上、イタリアでは18万人以上の方がCOVID-19のために命を落としています。

では、日本ではどうか。日本での死者は7万3791人と、他の先進国よりもダントツで少ないのです。G7（先進7カ国）加盟国の中では唯一、カナダの死者が5万1930人と日本よりも少ないですが、人口あたりの死亡者数はカナダが100万人あたり1353人に対して、日本が100万人あたり588人です。

G7の中でも日本は、COVID-19の被害が圧倒的に小さな国だったのです。もちろん、日本よりもよい結果を出した国は他にもあります。例えば、インドネシア。例えば、タイ。例えば、ベトナム。例えば、シンガポール。こうした国では、人口あたりの死亡者数が日本のそれより少なく抑えられていました。

しかし、それでも日本は新型コロナの死亡者数が世界的にはかなり少ない国です。新型コロナで死亡リスクが非常に高い高齢者が多い国にもかかわらず、です。

そんなわけで、日本の新型コロナ対策は国際的には一般に高く評価されています。もちろん、あれやこれやの局地的な失敗はありましたし（クルーズ船とか）、構造的な欠陥も多々あるのですが、全体としては日本はコロナ・パンデミック対策の成功国なのです（*7）（*8）。

日本でCOVID-19の被害が小さかった理由

では、なぜ日本はCOVID-19の被害が（相対的に）小さかったのか。理由はいくつか指摘されています。例えば、社会活動抑制策への国民の遵守率が非常に高かったことなどです。

そして、成功の最大の理由の1つとして指摘されているのが、高いワクチン接種率だったのです。2023年1月16日の段階で、人口100人あたりのワクチン接種回数は302・82回。1人あたり3回以上で、これは世界平均を大きく上回りますし、先進国ではトップレベルです。プライマリ・ケアや予防医療で世界最先端を行っているキューバには及びませんが、素晴らしい数字だと思います（資料1）。

日本はOECD（経済協力開発機構）加盟国の中で、国民における政府への信頼度が非常に低い国で、コロナ禍にあった2021年時点では、29.1%しかありませんでした（資料2）。

一般に、政府への信頼が低いと、予防接種の接種率は低下するのが普通ですが、「にもかかわらず」新型コロナワクチンは日本でよく接種されてきたのです。

その理由をはっきりしませんが、ぼくの推測では「ノリ」のおかげだと思っています。あるいは「空気」と言ってもよいでしょうか。

「ワクチンを接種しよう」という同調圧力を醸し出すことができた日本政府

昔から日本人は、「皆がやる」という「ノリ」さえ作ってしまえば、同調圧力が広く作動して、皆で同じような行動をとってくれるのです。だから、日本では「ワクチンを打つ」という「ノリ」さえ醸成されてくれれば、皆がワクチンを打ってくれるのです。

有名な沈没船ジョークがあります。豪華客船が沈没しそうになり、救命ボートはキャパがいっぱいで、誰かが海に飛び込まなくてははいけません。船長は各国の乗客を説得して海に

飛び込ませようと試みます（あくまで、ジョークです）。
アメリカ人には「ここで飛び込めばヒーローになれますよ」と言うと飛び込む。
ロシア人には「海にウォッカの瓶が流れていますよ」、
イタリア人には「海中を美女が泳いでいますよ」、
フランス人には「絶対に海に飛び込まないでください」、
イギリス人には「紳士はこういう時、海に飛び込むものです」、
そして、日本人には「みんなも、飛び込んでますよ」と言うと飛び込む。
というものです（しつこいようですが、あくまでジョークです）。

これが日本人の大好きな「同調圧力」というわけです。

しかし、日本人が同調圧力に弱いのであれば、逆に「ワクチンを接種しない」という同調圧力だって醸成できたわけです。そうなれば、日本では「皆が」ワクチンを接種しない状態となり、現在よりももっとももっとたくさんの方が新型コロナで死亡していたかもしれせん。

同調圧力は吉と出ることもあり、凶と出ることもあるのです。

だから、日本の新型コロナワクチン接種政策の「成功」に、日本人の国民性が大きく寄与していたことはおそらく間違いないと思います。

けれども、だからといって「政府にはなんの功績もない」などと言うつもりはありません。「ワクチンを接種しよう」という同調圧力を醸し出すことができた日本政府や担当者の力量は素晴らしかったとぼくは思います。こんなに政府が信用されていないにもかかわらず、その「空気」を作ることに成功したのだから。